

狂言 タブレットコンテンツ

次のパフォーマンス：^{きょうげん}狂言という演劇
棒縛り（棒に縛る）

狂言は、身体的なユーモア、言葉遊び、不条理に重点を置く伝統的な喜劇です。

その起源は、かつて田植えや収穫祭で行われた軽技です。

狂言は 14 世紀から 15 世紀にかけて能と並んで発展しました。

狂言は庶民の日常生活のシチュエーションに焦点を当て、日常的な言葉を使用するため、庶民に人気がありました。

現代の狂言は単独で上演されたり、能の合間に行われたり、神々への奉納として祭礼で上演されたりします。

狂言師は、手に持てる小さな道具を時々使い、それを超える多くの小道具に頼りません。

棒縛り（棒に縛る）という演目は、金持ちの家に住む 2 人の使用人である太郎と次郎の物語です。

主人が家を出るたびに、彼らは騒ぎを起こし、主人の酒を飲みます。しかし今回は、主人に策があり…。

主人（長いズボン姿）が使用人の太郎と一緒に入ってくる。

主人：「私が離れる前に次郎を縛る必要があるが、彼はかなり強い…何ができるだろうか？」

太郎は、次郎が棒を使って護身術を訓練していると言及する。

太郎：「機会を待って、彼を彼の棒に縛り付けてみませんか？」

次郎が呼ばれ、その腕前を披露する。

次郎：「この棒さえあれば、どこから脅威が来ても怖くない！」

次郎がポーズをとると、主人と太郎は彼をつかまえ、腕を棒に縛る。

次郎は自分が縛られた理由が分からないと言い張る。

太郎が気を散らしている間、主人は彼も縛る。太郎も理由は分からないと言い張る。

主人：「私が出るとき、お前はいつも私の酒を飲む！今はこのまま、私が出ている間に留守番をしろ！」

太郎：「ああ、本当にこんな風に私たちを置き去りにした！

…

さて、やっぱり美味しいお酒が飲みたい…」

次郎は、まだ少し手を使うことができることに気づき、なんとか酒蔵に侵入した。

次郎：「開いた、開いた！見ろ、この酒の壺を！この壺はまだしっかりと封がされている。これを持って行こう！」

次郎：「いつもの大きな盃を使おう！」

次郎は太郎に注いでやった後、自分の分を飲もうとする。

太郎：「何をしている？酒をこぼすぞ！」

次郎：「見ている！ちゃんと飲める！」

次郎は盃に手が届かないので、太郎は次郎のために盃を持とうと申し出た。

次郎：「おっしゃる通り、これは美味しい！」

太郎と次郎は酒を飲むためにうまく助け合い、酔っ払って歌を歌う。

酔いが深まる中、太郎は歌い、次郎は踊りを披露する。

彼らが踊りに夢中になっている間に、主人が家に帰る。

次郎はさらに酒に手を伸ばし、盃の中に主人の姿の反射を見て、太郎に見るように言う。

次郎：「ご主人様の機嫌の悪い見た目の悪い顔だ！」

太郎：「なんと苦々しい表情だ！」

次郎（笑って）：「彼はいつもこんな感じだ！」

主人：「分かった！お前たち2人は私の酒を盗んでまた酔っぱらったな！」

太郎と次郎：「どうかお許しを！」

主人：「誰かあの怠け者の使用人たちを捕まえろ！お前たちはこれで逃げられないぞ！」